特集

農業に夢をかける

深刻な後継者不足や荒廃する耕作放棄地の増加など、農業が抱える課題が多い中、日野町の『農業』は熱い。

町内では、全国コンクールで上位に入賞するおいしいお米を育てたり、手間暇かけて育てた旬の野菜を出荷するなど、元気な生産者の活躍する姿が見られます。

その中でも、町にーターンして就農し、『農業』に夢をかける若者が増えています。夢をかなえるため、日々汗を流す皆さんに話を聞きました。

トラクターでの代かきを終え、安どの表情を見せる安達徹さんと亜弓さん

安心・安全な食に関心があるんです
今がチャンスと飛び込みました

安達（あだち）　徹（とおる）さん　　亜弓（あゆみ）さん
（舟 場）

「農業のむずかしさを感じている毎日。目の前のことをやるだけでも精一杯」と笑顔で話す徹さんと亜弓さん。「大きな機械を動かす仕事に、ドキドキ、冷や冷やの毎日です」と照れ笑い。

あちこちで田植えが進む中、慣れない大きな農業機械を運転し、一生懸命田植えの準備をするＩターン就農者の安達徹さんと亜弓さん夫婦は、今年３月から別所を中心に米や野菜を生産・販売する松本優栽（ゆうさい）（松本洋一代表）で、農業技術を学ぶ研修生として働いています。

２人は米子市出身で前職は事務職。徹さんは「全く農業とは無縁でした」と苦笑いし、亜弓さんは「実家は、米と野菜を作る兼業農家ですが、私は全くしたことがありません」とはにかみます。

転機が訪れたのは今年１月。現在住んでいる舟場の家の入居者募集と松本優栽の研修生募集が目に留まったから。住むところと優れた指導者のもとで農業技術を習得できるというチャンスが訪れたため、「今しかない」と飛び込みました。

「今、子育て中の若い人たちは、安心・安全な食に関心があります。それをテーマにしたイベントに参加するうちに、自然と農業に興味がわいてきました」と徹さんは話します。そんな夫の思いに亜弓さんは「農業は大きな機械を動かします。体力的な不安があり、とても迷いましたが、踏み込んでみないと分からない」と決心。

２人は今の生活に「目の前のことをこなすだけで１日が終わります。毎日が新鮮。大きな機械を動かすには勇気が必要なんです」と苦笑い。しかし、表情からは充実感が伝わってきます。

２人は、午前８時に出勤し、その日の仕事を確認した後、別所をはじめ、町内の田んぼへ出かけ、午後５時に終業します。

松本優栽の松本代表は、昨年、長野県で開かれた米・食味分析鑑定コンクール国際大会都道府県代表の部で『金賞』を受賞した生産者。その金賞受賞米を食べてみた２人は「おいしい。噛めば噛むほど甘味が口に広がります。つやつやで、冷めてもおいしく、驚きました」と目を丸くします。

「松本さんの田んぼに対する姿勢を見ながら、勉強させていただいています。苗の状態を見て小さなことまで気を配ることが結果に出ると、日々感じています。本当に自分に農業ができるのだろうかと不安はつきませんが、一生懸命やるだけ」と強い意志が感じられます。

チャンスが重なり、日野町で農業をすることになった２人。「皆さんが気さくに接してくださり、農作業中に声をかけてもらえ、うれしいです」と笑顔。

飛び込んだ『農業』の世界。２人の夢を聞くと「まだ２カ月で目の前のことで精いっぱい。夢は、自分たちの作った安心・安全な農産物を子どもたちに食べさせてあげたいな」と希望に満ち溢れていました。

そんな２人に松本代表は「とにかくやる気がすごい。仕事に取り組む姿勢は素晴らしい。今後は、町内外に相談し合える仲間をつくり、日野町の農業を担ってほしいと思います」と、期待に胸をふくらませました。